

# 「在日」韓国舞踊団 芸術祭に初参加

## 文化庁外国人主体の団体にも門戸

今年で四十九回目を迎える文化庁主催の芸術祭に、日本人以外のアーティストが主宰する団体が初めて参加することになった。マンネリ化した芸術祭の見直しの一環として、参加規程が変更されたため、七年前から参加を希望していた朴貞子韓国舞踊団（東京都中野区）が一日、文化庁から舞踊部門への参加決定の知らせを受けた。

朴貞子さんは在日韓国人二世の舞踊家。一九八〇年に同舞踊団を設立、創作舞踊を中心に日本国内やソウルで公演活動を続けている。団員は約四十人、このうち八割は日本人で、残りが在日韓国人。

参加作品は、親子三代にわたる韓国農民の生活を通して、人間の愛と悲しみを描いた舞踊詩劇「アリアリ」（関矢幸雄原作・演出）。十月十四日、東京都品川区の「ゆらほーと」で公演し、審査される。

朴さんは七年前、念願だった国立劇場大劇場での公演を実現させた。その時、今度は芸術祭に参加して認められたいと考えた。文化庁に問い合わせたが、「外国人はダメ」と門前払いされた。その後、芸術祭関係者や外務省に相談に行くなど参加を訴え続け、ついに実現にこぎつけた。

「私は日本で生まれ育ったので、『半日本人』だと思っている。それだけに今回は、公平に受け入れてくられてうれしい。韓国のすぐれた伝統芸能をベースにし

た創作劇を演じたい」と朴さんは話す。

文化庁文化部は「十年に一度、芸術祭を見直す芸術祭懇談会（文化庁長官の私的諮問機関）からの報告のなかに、国際化に対応するため、日本側との共同制作であれば外国人が主体となった公演も認めるべきだ」という提言があった。これに沿って参加規程を手直した」と説明する。

芸術祭舞踊部門には今年三十一団体が参加の予定。十月中に公演をし、十二月に受賞者が発表される。



芸術祭に参加することになった舞踊詩劇「アリアリ」。子どもを祈る農民たちのシーン。93年10月、東京・国立劇場で、写真家・南部正彦さん撮影